

『電腦ゼミナール』を通して

卯城祐司

現代語・現代文化学系助教授

■きっかけ

「5分で出来ますよ」と、意外な答えがI君から返ってきた。それが、ホームページ作成に乗り出すきっかけだった。彼は当時、院生のページを管理しており、いつかそのマジックとも思える仕組みを学びたいと機会を窺っていた。ずるずると気後れしながら、やっと勇気を出して尋ねたのが修了パーティーの席だった。

「電子メールや、Word、Excel位しかわからないけど、大丈夫？」など、初めてのお泊まりに出かける子どものように問い続けたが、I君の笑顔は変わらなかった。「とりあえず、Webページ作成ソフトを買ってください」と言われ、届いたのが、彼がつくばを離れる前日だった。

「名前はどうしますか」と問われ、「えっ」と戸惑った私に、I君が「『電腦ゼミナール』とでもしておきますね」と入力し、本当に5分でWeb上にその文字が現れた時は驚いた。「じゃあ、ここから先

はがんばってくださいね」と彼が去った後、しばし呆然とし、『電腦ゼミナール』という名前は今も残ることとなった。

■目的

そもそも、講義やゼミ活動とホームページの連動を考えたのは、講義がその場限りで終わり、院生や学生たちの研究が毎年ゼロから始まることへの問題意識からだった。彼らは、在籍期間の間、もちろん講義の中で力をつけ、ゼミでは、それぞれ研究テーマを深めるが、長いスパンの研究・教育の積み重ねがあれば、いつもゼロからスタートすることもなく、進歩も加速するのではと考えた。

そこでまずは、講義の内容や提出レポート、研究室で学ぶ院生や学生たちの研究・勉強会などをホームページにのせ、データバンクの構築を目指した。このことによって、内容はともあれ、その場、その場で消えていた講義や論文指導、ゼ

ミ活動などが、時間を超えて存在し続けることになった。

例えば大学院進学を希望する学群生や、修論・卒論研究を前にした下級生たちが、前年度までの積み重ねから学ぶことが出来れば、講義や論文指導のスタート地点が少しでも高まるのではと期待した。また、修了・卒業生たちも、Web上でいつでも研究室に戻ることが出来、ゴールも(あわよくば)無限大に高まるのではないかと夢を抱いた。そして、在学生にも、面会時間に限らず、いつでも出会える場を設けられるのではとも考えた。

したがって、作成当初は(あるいは今も)、学内のみを念頭においていた。

■立ち上げまで

気持ちだけは先行していたものの、技術的には何も分からず、初めは、アップロードだけで正にアップアップだった。

講義内容については、レポーターが、レジュメに、ディスカッション、私のコメントや板書などを加えて提出した。最初は、メールの書類添付でやりとりしていたものの、ウイルス対策ソフトがパソコンの画面に赤々と警告するに及び、メールに貼り付けてもらうことにした。形式が崩れたり、文字化けしたりと、Webにのせる手間はかかるものの、身の

安全には代えられない。

一方、院生・学生たちのレポートについても、電子メールによる提出としたが、「お送りしましたが、アドレスが間違ってます戻ってきました」とか、「パソコンの調子が悪くて遅れました」という妙なケースも混じるようになり、今ではプリントアウトも同時に提出してもらっている。

当初はファイル名も漢字で、見事に文字化けし、「誰か、教えてあげてください」と、学外の掲示板に助言をもらったりしたが、相変わらず今もHTMLには疎い。

■現在の構成

ページでは、「うしろ向きの写真」が出迎える。私の名字が難しく、「名前はどうしても、前向きにがんばります」といつも自己紹介していることから来ている。

講義では、受講生の問題意識が修論・卒論へと発展するよう、3本から5本の文献を読んで、あるテーマについて論じる試みを続けているが、そのレポートが、お蔵入りせずWeb上で生きてきた。

教室以外のページで今一番の目玉は、院生のUさん担当の「キャンパス・パトロール」で、学内の写真などをのせ、意外に気づかない隠れたスポットなどを紹介している。当初の私のものに比べ格段にセンスが良くなり、今後も院生のNさ

ん、学群生のKさんに引き継がれる。

「在学ゼミ生談話室」には、修論・卒論にいたるプロセスが残る。幸い院生や学生に恵まれ、みな真剣に取り組み一度は私の前で涙を流す。女性の場合は妙な誤解を生みはせぬかと、おろおろさえるするが、その汗と涙を記録している（もっとも最近では、私が涙を流すことも多くなった）。また、研究に不可欠なSPSSの伝達講習、項目応答理論や因子分析の処理手順紹介、勉強会の様子など、研究室の知や学風といったものが伝達・継承されるよう取り組み、ゼミ活動が少しでもダイナミックなものになればと考えている。

「論文を書いてみよう」でも、「第2言語習得に関する用語集」、「SPSSの処理手順」、「自作マークシート集計・採点ソフトウェアの使い方」、「項目分析ソフトの使い方」など、院生たちが、それぞれ得意分野を発揮している。当初は私が一人で何もかもやっていたが、徐々に院生・学生たちに任せようになった。思うとおりに行かず、「自分ならば・・・」と感じる場面もあったものの、結果として、内容も広がり充実し、研究室の院生や学生たちが自ら企画を考えるなど、活気が出てきたように思う。

ただ、プライバシーに配慮し、学籍番号やはっきりとした写真は避けている。

■これまでのところ

予想もしなかったのは、学外からの反応で、ある論文について講義の中で私がコメントしたところ、それを目にした著者の方からメールを頂き、びっくりしたこともある。一方、英語科教育法の講義では、達人と呼ばれる方の講義をビデオで見た後、授業者と学生たちのやりとりを、ページ上で展開することが出来た。

昨年度、私たちが専門とする英語教育学の博士課程受け入れも始まった。「人文社会科学研究科 現代文化・公共政策専攻 情報伝達・メディア論分野」と、パッケージから中身がわからず苦勞しているが、徐々に、本ページを見た志願者もぼちぼち現れるようになってきた。

以上、まとめるほどの試みではないが、軌道に乗るにつれ、ページにのせることで満足したり、時間や手間に追われ、私のコメントが少なくなったり、全体の目配りが利かなくなるなど、抱える課題も多い。しかし、研究会や講義に様々な顔ぶれが集い、学外からの問い合わせも増えるなど、小さなページの存在も実感している。今後も、蓄積した情報を整理し、インタラクティブな講義・ゼミ活動へとさらに活用していきたい。

(<http://www.modern.tsukuba.ac.jp/ushiro/>)

(うしろゆうじ 英語教育学)